

報告：日本第四紀学会 1991 年大会

日本第四紀学会 1991 年大会が 8 月 24～27 日に開催された。24 日、25 日には高知大学において総会、シンポジウム、研究発表会が、26 日、27 日には高知から足摺岬にかけての巡検が行われた。

「黒潮圏の第四紀古環境」をテーマとしたシンポジウムは、第 1 部ネオテクトニクス、第 2 部古環境に分けて行われた。第 1 部では満塩大洗氏により主に高知を中心に四国の第四系が総括された。また、その他 3 つの報告があり、西南日本の地殻変動や断層の活動年代が報告された。その中で、岡村 真氏らは太平洋沿岸域で音波探査とピストンコアリングによる断層の活動年代について報告した。第 2 部では主に黒潮域における海洋や環境変化、植生変遷、先史文化などについての報告が行われた。これらの報告はそれぞれ密接に関連しあった内容であるため、十分な議論が期待されたが、残念ながら総合討論が時間切れのため十分に行われなかった。「第四紀研究」のシンポジウム特集号での議論を期待するところである。

シンポジウムにおける植生史に関する内容について、松下まり子氏の「黒潮圏における完新世の植生変遷」では、完新世における南九州、南四国、本州太平洋沿岸域の植生変遷に関する既往の研究成果を概観し、これらの地域では完新世の初期にシイを中心とする照葉樹林が成立していたことが示された。さらに、松下氏自身の資料を中心として、黒潮の変動が照葉樹林の発達に強く関連していることが明らかにされた。山中三男氏の「南四国における第四紀以降の植生変遷」では、中村 純氏の資料を中心に更新世前期、中期、後期そして完新世における南四国の植生変遷について報告された。最終氷期の堆積物は南四国では比較的少ないが、この中で、高知県南国市伊達野において最終氷期亜間氷期に対応すると思われるスギ属、モミ属、ツガ属、ハンノキ属などの優勢な層準が認められることを紹介された(中村氏の未発表資料)。完新世では南四国の低地と山地の植生変遷が示された。さらに、稲作について、約 3000 年前にイネ属花粉が出現することを述べ、縄文時代の後・晩期に稲作が行われていた可能性を示した。

一般研究については、39 件の口頭発表と 3 件のポスターセッションが行われた。植生史に関連する分野では、南大東島における堆積物の花粉分析にもとづくオヒルギ群落の変遷、滋賀県愛知川河床から発見されたスギ科を中心とする化石林などの報告があった。大阪府上町台地南部では、AT 火山灰層準以下の堆積物の花粉化石、珪藻化石などが報告された。また、西南日本の中期更新世におけるアカガシ亜属多産層準の同時代性が示された。AT 火山灰降灰以降の連続した堆積物の花粉分析結果が琵琶湖と伊豆半島において示された。さらに、山中湖湖底や静岡県浮島ヶ原堆積物では珪藻分析、花粉分析結果が報告され、完新世後期の環境変遷が考察された。

植生史に直接関連する主な一般研究発表の表題と発表者は以下のとおりである。花粉分析からみた南大東島オヒルギ群落(黒田登美雄ほか)、中海湖底表層堆積物の花粉分析—分布状況と最近 20 年間の変化について—(渡辺正巳ほか)、大阪府堺市、上町台地南部の上部更新統一(その 1)火山灰および¹⁴C 年代(小倉博之ほか)、同(その 2)古環境変遷(此松昌彦ほか)、滋賀県愛知川河床から産出した化石林について(山川千代美ほか)、琵琶湖底堆積物の花粉分析による最終氷期最盛期以降の古環境変遷(樋口左紀子・井内美郎)、中期更新世のアカガシ多産層準(杉山雄一・水野清秀)、静岡県浮島ヶ原雌鹿塚遺跡周辺の自然環境の変遷(松原彰子)、伊豆半島南部蛇石火山大池における最終氷期以降の堆積物の花粉分析(叶内敦子ほか)、山中湖湖底ボーリング・コアに記録された過去 2500 年間の環境変遷史(小杉正人ほか)、5000 年前にデルタは急成長した?—埼玉県三郷市の沖積層の検討から—(遠藤邦彦ほか)、表層堆積物中のプラントオパールと現存植生との関係—小櫃川河口域を例として—(江口誠一)、コナラ二次林で生産されるコナラの花粉粒数の推定(清水丈太)、加速器¹⁴C 年代測定法により測定可能な古い年代の限界(中村俊夫・中井信之)。

満塩大洗氏、山中三男氏、木村剛朗氏(山中氏は当日急用で欠席された)のお世話により、「足摺岬方面の第四系・植生と縄文遺跡」のテーマで行われた巡検では、満塩氏、太田陽子氏、加賀美英雄氏らが土佐湾周辺の第四系について解説され、活発な議論が行われた。また、中村市では約 15 cm におよぶ露頭のアカホヤ火山灰層を見学した。さらに、平野遺跡(前期縄文時代)や宿毛貝塚(中期—後期縄文時代)などの遺跡では木村剛朗氏により詳細な解説が行われた。

(高原 光・川辺龍太郎)